

沖縄の戦争を知る2日間

# 沖縄の戦争展

日時：2019.6.22 (土) ~ 6.23 (日)  
会場：八重洲ブックセンター 本店 8階ギャラリー  
JR東京駅八重洲南口徒歩1分

## 10:00~19:30 展示

- ・沖縄戦、移民先の南洋地上戦の体験談と絵画、当時の写真
- ・県内で遺骨とともに掘り出された遺物
- ・沖縄戦の戦後補償問題、遺骨収集の現状

## インタビュー映像記録

### 12:30~13:30 を共に見て語る座談会

- 6/22 戦災孤児が見た沖縄戦(沖縄・民間戦争被害者の会)
- 6/23 本土出身の日本兵・近藤一さんの戦場体験

## 講演

- 6/22 記憶は風化しない  
~沖縄戦のPTSD、福島震災後ストレス症状について~  
精神科医・蟻塚亮二氏
- 6/23 戦後の未解決問題  
~民間人戦後補償、戦没者遺骨の戦後史~  
毎日新聞記者・栗原俊雄氏

壕から出て投降した491名の民間人  
1945年6月24日撮影  
沖縄県公文書館 提供



**当時7歳**  
ミンダナオ山中を逃避行  
日本兵が女性を銃剣で刺して、食糧を強奪して逃げて行ってね。大丈夫夫ですか。聞いていたらその人は腰を刺されて血の付いた手で私の手をつかんで最後に「ありがどう。ごめんね」ミンダナオ島

**6歳で戦争孤児に**  
あのほんとと言っ音。軍用地内で畑をしてるんですが、揺れるほど、フライビンでの音思い出してたまになぜか爆風の臭いがする時がある。これあの時の臭いだって悲しくなる時がある。鉄の臭い、あの臭い。

**5歳で戦争孤児に**  
サイパン  
ヨシ子姉さんが「秀ちゃん、手榴弾、これで死のうって。飛び込んで自決するの。もういっしょに死なないと生きてそのじまじんと来るしぶきはみな血の色。軍艦や敵の船の間、間は皆人が浮いてましたね。

**パラオからの引揚げ船が撃沈、姉弟が死亡**  
あっちこっちと床が落ち、姉は魚雷の破片を首に受けてもう起きられないわけてすよ。海水がどんと入ってきて、死体が浮いて。時間がたいて早く！急げ！船員たちはもう船底に降りて来ない。姉も声がどんどん小さくなっていて。

**伊江島 当時9歳**  
ガマで一門の集団自決  
今、死ぬから固まれと言われ、私は母を抱きかかっていた。2人の中で母と自分だけが生き残った。

**渡嘉敷島 当時13歳**  
集団自決で母と5名の兄弟が死亡  
いつの間にかみんな死んでしまったか分からんさ。あーあ、あーあ、声帯なんか切られて今でも声出ないんだよ。首の後ろに垂れて首が半分残ってる人もいた。

**米須(糸満市)**  
瑞泉学徒隊(県立首里高等女学校第62師団野戦病院)  
兵隊は皆切り込み隊。私も連れて行ってくださいと懇願したが、「自分で自分の始末をしろ」と言われてどうやって死ねばいいかわからなかった。壕の入り口で寝て艦砲射撃で死のうと思った。神様、一発で死ねますように。

**摩文仁 当時8歳**  
戦車がこっち向かって、どーんとやられた。最初は火の中みたいで、真っ赤になって、だんだんだんだん黒くなって。おはあさんが私をだっこして、毛布かぶってうずくまってるんですけれど即死口から血を出してこんなにして亡くなってたんですよ。

嘉数 62師団独立歩兵第13大隊  
沖縄では、戦車と歩兵の戦いになる。(日本軍の)戦車はみたことがない。前に出てこない。それに対する抵抗は肉薄攻撃隊だけ。ダイナマイトを抱えて、戦車にぶつかっていく。その戦闘しかなかったです。

南風原町津嘉山  
沖縄県立第一中学校(14歳)  
第32軍電信36連隊

壕の中に投降を呼びかける人が入って来たんです。日本は戦争には負けたから投降者であつて捕虜ではない。でも皆アメリカのスパイとしか考えていなかった。二人を後ろから撃つて殺した。一人は「天皇陛下万歳」と叫びましたよ。



激戦地となったシュガーローフヒル  
上は1945年5月撮影  
沖縄県公文書館提供



現在の姿

**旧屋部村(現名護市)**  
当時16歳  
お家にいたら、アメリカが皆遊んで歩くわけよ。山に行ったら山でも米兵はあつちうち歩くから、隠れてでも恐かった。親もいないから。親戚からも見放されて。

**喜屋武(現糸満市)**  
当時2歳で戦争孤児に  
未だに母のこと忘れられないですよ。自分のお母さんどういってお母さんだったかねえ。諦めるしかないんだね。でも心の中ではいつてもいつても母のことを考えているんですよ。

ご来場をお待ちしています 【入場無料】

主催：戦場体験放映保存の会(戦場体験史料館 <http://www.jvwap.jp>)  
協力：沖縄・民間戦争被害者の会

## 展示内容

### ◆ 戦場体験の証言パネル、絵画

沖縄戦、あるいは県内からの移民先である南洋において、地上戦を体験した30名前後の方の体験談や、体験者が描いた絵画を展示します。証言者は、民間人、沖縄県出身／本土出身の兵士、鉄血勤皇隊、女子学徒隊、沖縄からの移民先で南洋戦を体験した方など、様々な立場にわたります。

対馬丸沈没、慶良間島への米軍上陸から、戦後の孤児の生活まで、証言を通じて沖縄の戦争を知ることができる展示です。

### ◆ 沖縄戦、サイパン戦などの米軍写真パネル

### ◆ 実物資料（沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」提供）

### ◆ 沖縄戦に関する”未解決問題”の現状

## インタビュー映像記録を共に見て語る座談会

戦場体験放映保存の会が、これまでに全国を回って戦場体験者の方から聞き取りをしてきたインタビュー映像記録をご紹介します。参加者の方から、「こんなことが知りたい」というリクエストを頂き、参考になりそうな映像をその場でスタッフが選んで映します。

今回は、沖縄戦を戦った本土出身の元日本兵・近藤一さんの証言と、「沖縄・民間戦争被害者の会」に所属する戦災孤児の方々の証言映像をお見せします。また、会場では、女子学徒隊の証言映像を上映しています。

## 講師紹介

### ◆ 蟻塚亮二氏（6/22 土）

1947年生まれ、精神科医。

1985年から1997年まで青森県弘前市の藤代健生病院院長、2004年から沖縄の病院に勤務。

2013年より、福島県相馬市のメンタルクリニックなごみ院長。

主な著書に

『沖縄戦と心の傷—トラウマ診療の現場から』

『うつ病を体験した精神科医の処方せん』

『統合失調症とのつきあい方』

『3.11と心の災害』（大月書店）など多数。

### ◆ 栗原俊雄氏（6/23 日）

1967年生まれ、毎日新聞記者。

戦没者遺骨の未帰還問題、民間戦争被害者の未補償問題、シベリア抑留など日本の戦争に関する諸問題を追及し続ける。

通常、戦争記事は新聞紙面では夏に掲載されることが多いが、年中取材を行っている栗原記者は”常夏記者”と呼ばれる。

『シベリア抑留 未完の悲劇』『遺骨 戦没者三〇万人の戦後史』『戦後補償裁判 民間人たちの終わらない戦争』など著書多数。第24回「平和・協同ジャーナリスト基金賞」奨励賞を受賞。

## 戦場体験放映保存の会について

### ● 戦場体験放映保存の会

2004年12月に設立。アジア太平洋戦争の戦場体験を主に証言映像で後世に遺す活動を行っています。元兵士・軍属の方々、沖縄や敗戦時の満州など、戦場となった地域におられた民間人の方々からの聞き取りを行っています。体験者自身が呼びかけの先頭にたち、戦争を知らない世代のボランティアが収録活動にあたる老若一体の活動を展開中。体験記録は「戦場体験史料館・電子版」<<http://www.jvvap.jp>>で順次公開しています

### ● 無色・無償・無名

私たちは「無色、無償、無名」を固い原則にしています。どんな立場の方も、どんなご意見の方も、ただ戦場体験を語り継ぐ一点だけで手を繋ぎあいます。戦争の極地であった戦場がドラマや将軍の戦記物のみで伝わることを避け、名もなき我々の声を残しておきたいのです。

## 会場アクセス

八重洲ブックセンター本店  
東京都中央区八重洲2-5-1



JR「東京駅」八重洲南口  
東京メトロ銀座線「京橋駅」8番出口  
(京橋エドグラン)

### 主催

公益社団法人マスコミ世論研究所内

## 戦場体験放映保存の会

〒114-0023 東京都北区滝野川6-82-2

TEL 03-3916-2664 (火木土日祝 10時～17時)

FAX 03-3916-2676

e-mail [senjyou@notnet.jp](mailto:senjyou@notnet.jp)

戦場体験史料館HP <http://www.jvvap.jp>